



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ICTを用いた英作文の添削指導：全員が英文を書くことに慣れるために(fulltext)
Author(s)	豊嶋, 維
Citation	研究紀要 / 東京学芸大学附属高等学校(57): 55-60
Issue Date	2020-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/152374
Publisher	東京学芸大学附属高等学校
Rights	

ICT を用いた英作文の添削指導

— 全員が英文を書くことに慣れるために —

Teaching Japanese-English translation by using Information and Communication Technology

— For everyone to practice writing in English —

英語科 豊 嶋 維

< 要旨 >

本研究は和文英訳の添削指導においてスマートフォンやPCを活用した実践報告である。大きく分けて2種類あり、1人1題担当を決めて担当の問題をICTを通して解答し添削する実践①と、複数題を全員が解答し抜粋して添削する実践②を行った。結論としては、指導するマテリアルの難易度や目的により、使用するICTを使い分けることが必要であるが、ICTを用いて行う英作指導は教員にとっての負担感も少なく、生徒へのフィードバックがより多く行える指導法であるといえる。

< キーワード > PC、タブレット、教室でのICT活用、lto1、和文英訳指導

1 はじめに

英語のライティングの授業において取り扱われるものの中で大きい部分を占めるのが「自由英作文」と「和文英訳」である。とりわけ後者の和文英訳については、与えられた日本語の解釈をした上で、日本語に込められた意味を英語で表現しなければならないという2段階のハードルがあるため、多くの日本人高校生が苦手としている分野と言える。

2 課題

前述した和文英訳の指導にあたり、本校では生徒の解答を黒板に書かせ、それを用いて添削を行うという手法を長く取ってきた。しかしながらこの手法にはいくつかの問題点がある。まず黒板のスペースが限られているということ。また教師が即座に見比べて添削を加えていくという点から1問あたり多くて4～5名の指名が限界であるということ。加えて50分という限られた授業時間において黒板に書かせ、消し、また書かせている間に生徒が英語について考えたり手を動かしたりする時間が損なわれてしまうこと。そしてこの手法を用いて50分間で扱える問題数は3～4問に止まり、クラスの半数程度しか添削の対象にならないということが挙げられる。

3 背景

和文英訳の指導は日本の英語教育の流れの中でも昔から行われている伝統的なマテリアルの一つである。和文英訳をしていくなかで、その問いとなっている日本語の

意味を理解し、さらに英語にしていこうという過程が必要なことから、生徒の持ちうる様々な能力を応用させる必要があるものであるが、与えられた文の直訳に終始してしまい自己表現を狭め、日本の英語教育でしか通用しないような特別な技術を育成しているのではないかという批判も少なからずある。

ただし自由英作文では内容が知っている単語に応じて制限されてしまうのに対して、和文英訳では生徒のレベルよりも少し高いレベルに足がかりを作ることができ、辞書指導等と併用することで知らない単語や文法を実際に使わせることができるという利点もある。あくまでも自由英作文との二極の存在として捉えず、違う方向の能力を育てる一手段として本稿では和文英訳について考えていく。

生徒が書いた英作文に対して行う誤り訂正であるWritten Corrective Feedback (WCF) には明示的に行うものと暗示的に行うものの2種類がある。本稿での実践では文法的な誤りや語彙の選択について行う明示的な指導と、他の生徒が書いたものに関して複数比較し自分の誤りに気づかせるという暗示的な指導の両方を取り入れることで和文英訳の良さをより引き出していくことを目標としている。

またライティングのフィードバックについては、学習者と対話者とのインタラクションの役割を重要視し、対話の中で学習者の気づきを促すという「インタラクション仮説」と、教員やより高いレベルの学習者による支援により、より高みに到達することを促す「社会文化理

論」が根拠とされていることが多い。本稿での実践についてもこの2つの理論をもとに、生徒と日本人教師・また ALT との対話を通じた添削指導や他の生徒の書いた英作文を見てお互いに学び合うことを通し生徒の学習の変化やその効果を考えていく。

4 今回の実践

本稿では2018年度に2年生を対象として行った和文英訳指導（以後実践①）と2019年度に3年生を対象として行った指導（以後実践②）を紹介していく。いずれも使用したテキストは山口書店の「クリエイティブ英作文」の和文英訳問題である。この実践では解答時間を授業時間内に生徒全員に等しく設けてICTを通じて解答をデータで提出させる。それにより全員が時間内に同じ問題に向き合うことができ、自分の解答を作ることができる。全員が同じ問題について取り組むので、その場が出た質問をクラスで共有できるという強みもある。データで提出させることで、生徒の解答を記録として残すことができ、あとでそれをもとにハンドアウトを作成できるという利点や、その際に筆跡が残らず匿名性を保持できるという利点もある。

本校で行なっている和文英訳指導は「日本人教師による解説」と「ALTと日本人教師によるTT」の2パターンがあるが、実践①は前者、実践②は前者と後者の組み合わせで行なっている。

4-1 実践① 使用したソフト G suite 以外

4-1-1 iOSのメモ帳機能（デフォルトの無料アプリ） （利点）

- ・タブレットは運搬が楽
- ・iPhoneを持っている生徒は自分の端末で解答可
- ・操作感が良い
- ・air dropで解答をすぐ送ることができる ※本校では教員全員がMacbookを持っている
- ・教員が書き込めるペン等を持っていればiPadを使用して生徒の書いた解答に手書きで添削ができる（黒板に投影し、チョーク等での添削も可能）
- ・メモ自体をPDFや画像にして保存できる

（欠点）

- ・文書ファイルではないので文字サイズの変更ができず、手書きの解答でないと見にくい
- ・指で解答を書くと文字がかなり読みにくい（ペンがあるとかなり改善される）
- ・air drop以外の共有方法が限られる（メールは形式を

揃えるのが難しい）

- ・それぞれのメモ帳データは一つにまとめることはできない
- ・旧型のiPadには手書き機能が付いていない（本校が所有する共用iPadでは実践ができない）

4-1-2 whiteboard.fi（無料ブラウザアプリ）

（利点）

- ・生徒の端末や共用タブレットを用いる
- ◎ブラウザ上のアプリであるためアプリのインストール必要なし
- ・ログインや会員登録等の必要なし
- ・同時解答・同時閲覧可能・即時更新可能
- ・手書きもタイプも可能（文字の大きさ変更、色変更も可能）
- ・クラスごとに仕分けができる（クラスコード発行）
- ・生徒の解答は画像として保存できる

（欠点）

- ・解答スペースが狭く、長い文章は書けない
- ・データは一定時間が経つと期限が切れて見られなくなる
- ・データ処理が重い、反映に時間がかかる
- ・クイズのような一斉に一問一答の答えを出させるタイプには向いているが、解答を利用した添削指導には向いていない

4-1-3 ロイロノート（アカウント有料、無料アプリ）

※無料体験期間を利用して実践

（利点）

- ・アカウントを購入すれば、それぞれのスマホでも共有ipadでも操作可能（インストール必要あり）
- ・操作感がよい（反応がよい）
- ・手書き・タイプでの解答可能
- ・共有の機能が充実している
- ・生徒のデータへの直接書き込み添削可能
- ・同時解答・同時閲覧・即時更新可能
- ・PDFとして解答を保存できる
- ・幅広いバージョンに対応している（初代iPadなど）

◎課題の連絡、提出箱の作成、資料の配布がアプリ上で可能

（欠点）

- ・1人1台デバイスが手元にある必要がある
- ・1人1つ有料アカウントが必要
- ・他の科目との併用が前提となるか

4-2 実践①② 使用したソフト G suite

本校は Google Suite for Education を採用しており、生徒一人一人が学校の google アカウントを所持している。Google Suite for Education では無料で複数アプリを利用することができるが、そのうちグーグルスライドとグーグルドキュメントを使用したものを紹介する。

4-2-1 Google Slide

グーグルスライドは発表用スライドを作成できるソフトであり、ブラウザ上およびアプリを通して使用が可能である。スマートフォンからのスライド編集はアプリのダウンロードとグーグルアカウントが必要。

(利点)

- ・無料アプリをインストールすればそれぞれのスマートフォンでも操作可能
- ・全員が同時編集可能、即時更新、反映が目に見える。クラスごとにグーグルスライドを作れば仕分けができる。
- ・サムネールを見ながら解答の順番の入れ替えが簡単
- ・ほぼパワーポイントと同じなので生徒が操作に慣れている
- ・keynote への変換ができるので、デジタルペンでの書き込み添削ができる
- ・リンクを共有しておけば、授業外での編集も可能なため宿題にすることもできる

(欠点)

- ・それぞれがグーグルアカウントを持っていることを前提とする
- ・1人が複数解答すると整理が困難
- ・グーグルのアカウントにログインできるようにしておく必要あり（接続で手間取ることも多々あり）
- ・タイプのためのみの解答となり、手書き解答はできない

4-2-2 Google Document

グーグルドキュメントは文書を作成できるソフトであり、ブラウザ上およびアプリを通して使用が可能である。スマートフォンからの文書編集はアプリのダウンロードとグーグルアカウントが必要。

(利点)

- ・スマートフォンで操作可能
- ・ほぼワードと同じなので、生徒は操作に慣れている

◎クラスルームと併用すると便利

(欠点)

- ・それぞれがグーグルアカウントを持っていることを前

提とする

- ・グーグルのアカウントにログインできるようにしておく必要あり
- ・タイプのためのみの解答

4-3 実践② ALT との TT について

4-3-1 概要

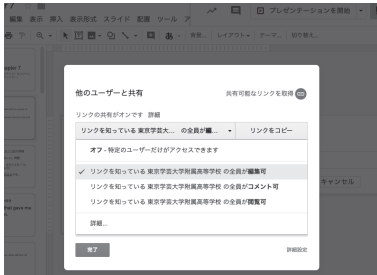
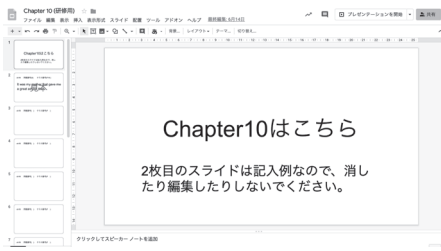
高3対象英語表現Ⅱの授業で月2回程度行っており、和文英訳指導にネイティブの意見を取り入れている。TTの授業の前までに生徒には解答を入力させ、入力されたデータを使ってハンドアウトを作り、それを用いて指導を行っている。大抵50分の授業で5～6問を取り扱い、各問題に5～6人の生徒の解答を比較できるように抜粋して載せている。「日本語を英語にする」という点において日本人教師が、「英語の表現」という点においてALTが解説をしており、生徒の解答データを黒板に投影し、ALTが書き込みながら添削をしている。

4-3-2 データ提出の利点

手書きでの英作文の提出でも比較指導は可能であるが、投影したりハンドアウトの作成のためには手書きの解答をそのまま使用することは難しい。もともとデータで提出をさせていけば、教員がタイプし直す必要性はなく、コピーアンドペーストで簡単にハンドアウトを作ることができる。また google slide や google document は iPad を使用した場合デジタルペン等を用いて書き込み添削をすることが可能であり、そのまま PDF 化して添削を返却することも可能である。

4-4 実践① 使用手順 Google Slide

1. 教師がグーグルスライドのファイルをクラスごとに作成（フォントの大きさや氏名番号の欄などを指定した解答の雛形や指示文を書いたものを含み、解答用スライドは人数分作っておく。）
2. 生徒全員を「共同編集者」として共有。
3. リンクをクラスのメーリングリストに送る or クラスルームでファイルを共有。



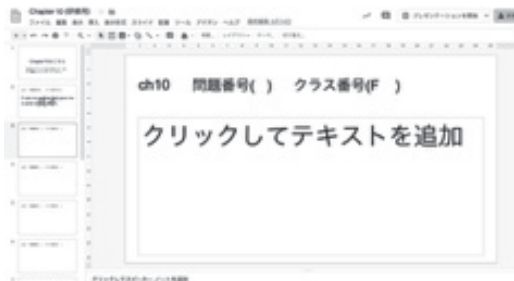
(図1) 手順1～3の実際の画面

4. 1人1問解答する。(この章では和文英訳の問題が5題あったので、40人の生徒を5問に割り振って解答をさせた)

- クロームブックを配布して、解答を入力させた。
- 個人のスマホにグーグルスライドのアプリが入っている生徒はスマホの使用を許可した。



(図2) 解答例見本



(図3) 生徒が解答する画面

- 5. 生徒の解答をPDF化し印刷して配布。
- 6. 追加事項があれば、書き込み添削をしたものをPDFにして配布。

<良かったところ>

- ・全員が授業中に英作文に取り組むことができた。(手持ち無沙汰がなくなる、全員その場で考える)
- ・雛形を用意していたのでみんな同じフォントになり、見比べやすくなった。
- ・英語のタイピングの練習になる。

<悪かったところ>

- ・全問を全員が解くことはできなかった。(割り当ての1問のみしか入力していない)

4-5 実践② 使用手順 Google Document

1. 和文英訳の問題の和文のみを打ち込んだファイルを用意。
2. グーグルクラスルームで「各生徒にコピーを作成」の形で課題配布する。

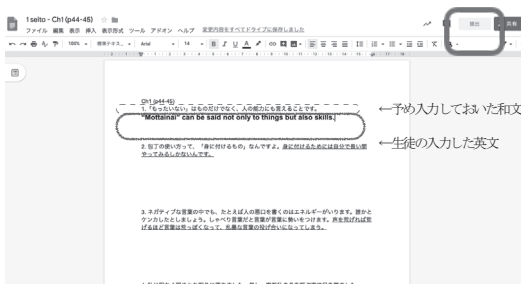


(図4) 教員が課題を配布する際の画面

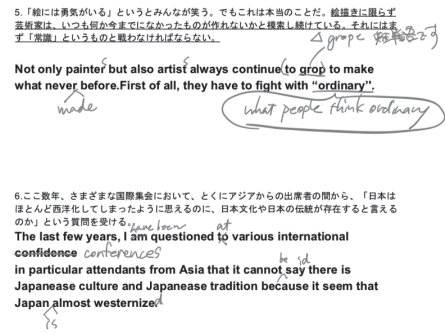


(図5) 生徒が実際に見る画面

3. 生徒に端末を配布し、それぞれ全ての問題を解答させる。
 - あらかじめフォントは指定しておいた。(ほどよいサイズ、見やすいフォント)
4. 解答を終えたら右上の提出ボタンをクリックさせる。



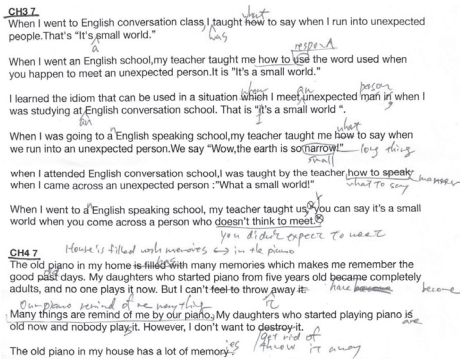
(図6) 生徒に配布した解答用ドキュメントの画面



(図8) 実際に生徒に返却した PDF の一部

5. 生徒の解答を抜粋したプリントを作成。

- ネイティブ教員が授業に入り、添削を行う。(抜粋解答をスライドにして黒板に投影し、黒板に書き込みながら解説。)
- 生徒はプリントに書き込みながら解説を聞く。
- その場でネイティブ教員への質問等もできる。
- 自分たちの解答を比較しながら解説を聞くことができた。



(図7) 抜粋プリントに添削を書きこんだもの(字は筆者)

<良かったところ>

- ・全員が授業中に英作文に取り組むことができた。(手持ち無沙汰がなくなる、全員その場で考える)
- ・雛形を用意していたのでみんな同じフォントになり、見比べやすくなった。
- ・全ての問題に取り組む体制ができた。
- ・生徒の解答が自動的にドライブに保存され管理が簡単になった。(グーグルクラスルーム経由でドキュメントのコピーを配布すると、自動的にクラスルームの課題ごとにドライブにフォルダが作成され、生徒の名前のついたドキュメントがアップロードされる)
- ・デジタルペンをを用いると書き込み添削や、PDFにして添削を返却することが可能。

<気がつけたところ>

できるだけ頻出ミスや語法など日本人には感覚的にわかりにくいところを抜粋し、予めネイティブ教員にその辺の解説を重点的にしてもらおうようお願いしておいた。

5 実践に関する生徒の反応

以下が実践①のあとに生徒69名(2クラス)に対して行ったアンケートの結果である。

Q1 iPad やスマホを用いた英作文指導について

- ・今後も続けて欲しい 52.2%
- ・たまにならやってほしい 30.4%
- ・やらなくてよい 17.4%

Q2 英作文を書くときの感覚

- ・手書きとは違う 15.9%
- ・違う(手書きの方が書きやすい) 31.9%
- ・違う(タイプの方が書きやすい) 31.9%
- ・違う(どちらもいえない) 20.3%

Q3 PDFで添削を返却することについて

- ・見やすい・便利 66.7%
- ・見にくい・不便 29%
- ・その他(タイプであればPDFがよい、等)

6 実践を経て

実践①については、授業中にクラス全員の解答を見ることができ、比較することができるようにすることを目的とした場合、ICTを用いれば効果的に指導できることがわかった。特にGoogle Slideに関しては操作感も生徒にとって難しくなく、繰り返し使っていくことでスムーズな指導ができる。ただし課題としてはその場で解説を加えることを考慮するとそれぞれの生徒に複数問の解答を用意させることは妥当ではなく、1人1問解答するこ

とが限界であるが挙げられる。そして割り当てを決めて解答をさせる場合、難しい問題に当たった生徒の解答するモチベーションが下がる傾向にあるように感じた。この点に関しては、「その場での添削」と「データを提出と添削に時間をとる」場合で使い分けることが重要であると考えられる。

実践②においては4月から11月現在に至るまで、Google Documentを通じ英作文をデータで提出をさせる指導を行なっている。初めは手書きでなく、タイプをすることに抵抗を感じる生徒も少なからずいたが、続けていくうちに自然と取り組めるようになった。また教科書に載っている問題のうち複数問を全員に提示することができ、割り当てがないため比較的实践①よりも解答する際のネガティブな反応は少なく、得意な生徒は素早く全問に解答できる一方で苦手な生徒は自分の解ける問題を選んで解答していくことができた。

生徒にとってもおそらく手書きで英語の文を書く機会は高校を卒業すると劇的に減り、以後はEメールや論文などタイプをすることが主流になっていくと考えられる。ペンと紙の世界に留まらず英語を使っていく世代にとって英語をキーボードでタイピングをしたりスマートフォン等のデバイスで入力することは意義のあることであるとも考える。

また教員の立場からしても、紙媒体で解答を集めることには負担が少なからずあり、解答データがすべてクラウド上にあり（学校のGoogleアカウントであるためドライブにアクセスできる人は制限されている）、自分のiPadからアクセスしいつでもハンドアウトを作ることができたり、自分のタイミングで添削ができるためかなり効率の良い指導ができています。ICTを活用した和文英作指導は今後ICTを日常的に使っていく生徒たちにとっても、また指導者の立場からしてもWin-Winの指導法であるといえるのではないかと。

7 参考文献

- 鈴木渉（2017）「実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導」、東京：大修館書店
- 木村博是・木村友保・氏木道人編著（2010）「リーディングとライティングの理論と実践—英語を主体的に「読む」・「書く」」（英語教育学体系第10巻）東京：大修館書店
- 金谷憲・久保野雅史・高山芳樹編著（2012）「英語授業ハンドブック高校編」、東京：大修館書店
- 桂邦彦（2006）「クリエイティブ英作文」、京都：山口書店
- whiteboard.fi (<https://whiteboard.fi/>)